

相田忠明さんが語る

地域に根づく子ども鬼太鼓

地域コミュニティの核

編集部

復活させた子ども鬼太鼓

大人の鬼太鼓を見て育った私（相田忠明）は、小学校5年生当時（昭和60年）、鬼太鼓を演じたいと、5・6年生中心に大人たちに働きかけ、戦後2・3年で途絶えていた「北方子ども鬼太鼓」を37年ぶりに復活させることになった。子どもたちがやりたいことを大人たちが応援し、支援してくれたのである。

当時、新穂北方には子ども鬼太鼓がなかった。大人の新穂中央青年会（新穂、馬場、三協、北方の集落で組織）鬼太鼓を子どもが演じやすいものに変え、2年目（昭和61年）は、村から補助金を受けてすべての鬼太鼓の道具（鬼の面など）を新しく購入し、6年生を

中心に本格的に集落の祭りで演じた。各メディアからも多く取り上げられ、お正月には全国放送のテレビにも出演した。3年目には新穂地区の4つの集落に子ども鬼太鼓は広がった。

あこがれの的 鬼太鼓

新穂地区の祭りは、4月に神社の山王祭り、6月に寺の天神祭りの年2回である。小間バチの効く、流れるような太鼓のリズムに乗り、能の流れをくむといわれる静と動が絶妙な舞の白鬼と黒鬼に、左右から2匹の赤と黒の獅子が激しく絡むという勇壮なもの。そこで踊る大人の鬼や獅子は子ども目の目に、ウルトラマンのようなヒーロー（英雄）に映る。

北方集落の天神祭は6月25日のため、子どもたちは祭りの1ヶ月前には練習に入り（小屋入り）、1年から6年生まで20人を3班に分けて、毎日夕方5時から7時まで練習する。

鬼の師匠が1人、太鼓の師匠が1人それぞれ毎日指導し、青年会の先輩たちが時々指導にあたる。

子どもたちは祭り当日、五穀豊穡、家内安全、無病息災を願って、10時過ぎから夕方6時過ぎまで集落内の家々を門付け（一軒、一軒の家を廻ること）し、小学校や保育園、お寺にもこれまでの鬼太鼓の練習成果を披露する。6年生が黒鬼と白鬼を舞い、1年生から5年生は裏打ち（太鼓を打つこと）や提灯をもつて声を掛け合うのである。

子どもの変化と親から子への伝承

女の子に変化があらわれる。5・6年生になると女性としての意識があらわれ、伝統芸能の鬼の衣装を着たり、練習はきついし、汗が出るなど嫌なこともしなければならなくなる。

しかし、鬼や獅子の役がいやだった子でも舞う時は、その瞬間ひとりの責任で演じなければならない。みんな

なの視線が集まり、師匠はじめ自分のために教えてくれているのだという意識は、それまでの気持ちを変え自分が主役だと自覚し、真剣に取り組むようになる。

スポーツなどの部活と違い、伝統芸能は今風の子どもたちにはとっかかりにくい面もあるかもしれないがとても物静かな子が、最初は出来なかつた鬼を立派に演じたりもする。鬼をやりきって大人から褒められ、自信にもなり、地域に対する考え方も変わる。周りのやらなかつた子どもが伝統芸能に興味を持つことにも繋がる。

小学校6年生になると、鬼太鼓はひととおりの踊れるようになる。伝統芸能は職人的というか、どんなにやっても完成型はない。伝統芸能は文献などのみでは意が尽くされない、口で伝え、身体で覚えていく―伝承する。だから20年前、30年前とで伝える内容が異なってくる、それが伝統芸能のおもしろみだと思う。

上手な人の太鼓のビデオをとって見せても全く伝わらない、大人が子どもに行動で見せることによつてすべてを伝え、身体で覚えさせる。

昭和60（1985）年復活させた当時の子どもは、いま親となり、その子どもが親と一緒に鬼太鼓を舞い、



上級生や大人から手ほどきをうける

親子2世代で地元の祭りを盛り上げる。いわば伝統芸能の基本を成している。

子ども鬼太鼓は地域コミュニティの核

幼稚園児や子どもは、地域での大人とのつながりがなかなか持てない状況にある。

それでも当地区では幼少の頃から、大人や子どもの鬼太鼓を見、聞きながら育つ。そして小学校に通うようになると、上級生や大人たちの手ほどきを受けやが

て一人前に鬼を舞うようになる。大勢の人の前で、拍手・喝采を浴びながら祭りの主人公となる。

鬼太鼓をとおして地域との交流を深めつつ、郷土の伝統芸能に誇りを持てる子どもに育っていく。このよう

な子どもの中には一旦島外や県外に離れても、故郷に大切に想い地元に戻ってくる子どもが多い。

子ども鬼太鼓は、地域の大人と子どもとのコミュニティの核となり、豊かな郷土の教育と文化の礎となっている。

現在、地方は少子化や若者不足、人口減少が問題になり、学校の統廃合も進んでいる。そのような時代背景だからこそ、より地域と子どもたちのつながりは必要になってくる。鬼太鼓についても継続していくことの難しさはあるが、自分の故郷を守る意味でも、次世代につなげていくことが大切だ。

私たちにとって鬼太鼓は故郷の誇りであり、大切な伝統（特に重んじて次世代に継承すべきもの）である。春が来て、また太鼓の音が聞こえてくる季節が待ち遠しい。

（文責・内山雄平）

相田忠明さんは、新徳中央青年会の会長（平成23年度）。

佐渡相田ライスファームिंगの代表補佐

ホームページ <http://www.aidarice.com>